２０２４．３．１７．主日礼拝説教

聖書： マタイによる福音書9章32～34節

『 新しい時代の始まり 』

これまで学んでまいりましたようにマタイの編集方法は、8～9章のブロックに癒しと敵対者への反論を集中して編集しています。これはイエスのメシア性を明らかにするためです。そして、このブロックを締めくくるにあたって最後に登場させるのが、本日の「口の利けない人をいやす」という小標題に表される通り、言葉が不自由な人です。これは発声が困難というのみでなく、耳の不自由な人を意味しています。この症状を持つ人をここに登場させるのは、先週も学びましたように、11;5との関連で描かれています。

さて、本日の記事は奇跡物語のように見えて、本来の治癒物語に共通する基本要素がほとんど省かれています。　例えば、症状の描写や患者の側からの懇願といった癒しのきっかけ等の状況説明もありません。さらに悪霊追放の行為にも一切触れず、先行の二つの物語のテーマであった信仰さえも記されません。ここでマタイが記すのは、癒しの後の人々の反応のみなのです。　実はマタイがこの物語を8～9章のブロックの最後に置いた目的もここにあるのです。これはおそらく1～9章まで読み進んできた読者に対して「あなたはイエスをどう理解し評価するのか」という総括的な問いなのでしょう。

マタイはここに人々の積極的・肯定的な声とファリサイ派に代表される否定的な声をモデルとして提案するのです。それは「あなたはどちらを選ぶのか」という問いかけなのです。そして、その選びとは単なる「物」の選び取りなんかではなく、「人生」の選びでもあるわけです。

この箇所は12章22～24節と共通しており、マタイはこれを文脈に合うように本日の箇所で作り替えています。この元はマルコ3;22から得ています。しかし、34節のファリサイ派の非難の言葉については12;22-24よりもマルコの原資料に近いのです。つまり、マタイはマルコの伝承を二回用いて、イエスについての理解が群衆とファリサイ派の間で分裂し、たびたび対立する様子を描く第一回目がこの箇所なのです。

32-34節までのすべての行には「悪霊」という言葉が記されています。32-33節は事の起こりと群衆の反応です。悪霊は如何ともしがたい現実の恐怖を意味しますが、33節ではそれが追い出された事への驚嘆へと発展しています。ここでは前代未聞の出来事として群衆は賞賛します。マタイの主張とは、これまで経験してきたイスラエルの救いの歴史は、今やイエスの出現において凌駕されたということなのです。つまり、「新しい時代の始まり」が宣言されるのです。しかし、同じ事態を目撃したファリサイ派は「悪霊の頭の力」と言い張ります。理解を改めることが人生であることを受け入れない姿がここに顕わにされてゆくのです。

物理や自然法則に合致しない現象を霊の働きと捉え、不思議な現象があると、それを霊的現象と言う人は必ずいるものです。しかし、マタイが描く霊の働きとはそのような超自然的現象にあるのではありません。霊とは「あなたの罪」を顕わにする明察性にあるのです。時には審き、時には醒まし、時には鎮めながら、人の心の真相を明らかにして偽りなからしめるのが霊の働きなのです。ですから、霊の働きに対しては、自らの罪の自覚で応えるよりほかに、人はなすすべを持たないのです。自分の罪の真実に泣く、これが霊の働きに対する人の事実でしょう。